

ヴェネツィアを心の故郷にした日本近代絵画の先駆者

“幻”の画家 寺崎武男伝

寺崎裕則（日本オペレッタ協会会長／歌舞伎・オペラの演出家）

I. 生誕 131 年、渡伊 107 年祭

なぜ 1907 年、東京美術学校西洋画科を卒業後直ちにイタリア・ヴェニスに渡った画学生寺崎武男（1883- 1967）が、すぐヴェニスでも有名な建築家ザヌンソ・トーレス教授のリオ・ヌオーヴォの新築したばかりのアトリエを自分のアトリエにして活躍できると共に、新聞で「画家寺崎武男が長崎ならぬ東京からヴェニスに来た」との記事と顔のカリカチュアまで描かれ報道されたのか。

その理由は、祖父寺崎助一郎は、渡辺華山と親友の徳川の幕臣で 1855（安政 2 卯）年 8 月、長崎奉行所へ手附出役で単身赴任、ついで 1857（安政 5 午）年 9 月に調役となり、家族も江戸より来、息子 遜（とあろ）（1852〔嘉永 5〕年生れ）も来長、日本の開国時に父を手伝い、1862（文久 2 戊）年 9 月まで長崎に滞在。日本は三百年の鎖国から開国に向かう。

遜は彰義隊の一員となったが、解散後横浜居留地管轄の仕事をしていたのか、1868（明治元）年、明治政府に就職、1872（明治 5）年英国に派遣され電信を研究、1874（明治 7）年に帰国。山縣有朋公のもとに仕え、鹿鳴館時代にも多くの助言を与え、1886（明治 19）年には伊太利国（イタリア）皇帝、並びに瑞典国（スウェーデン）皇帝より熙章を授与され、1896（明治 29）年には露国（ロシア）ロマノフ皇帝戴冠式に山縣有朋内閣総理大臣の秘書官長として随行し活躍、余りの激務の為、1903（明治 36）年 5 月、51 歳で亡くなる。

こうした日本の激動期を下支えした祖父、父共に欧州との深い関係があつてのことではないか。

II. 日本近代絵画の先駆者といわれる所以

①フレスコ画法、②テンペラ、古テンペラ＝ルネサンス式テンペラ画法、③エッチング、④リトグラフなどの描法、作品を本格的に日本に紹介。

1907 年よりヴェニスを中心に独、英、仏、米に留学。ヴェニス国立高等美術院（アカデミー）人体、彫刻、建築、版画 4 課卒業。同市高等装飾工業、フィレンツェ、シンニャにテラコッタ（土焼）を学ぶ。ベルリンにて帝室美術大学壁画科卒業、ベルリン大学に宗教哲学及び歴史科卒業。滞欧州 10 年、その間、1911（明治 44）年よりヴェニス商業大学（カ・フォスカリ）日本語科教授となり 15 年在職。イタリアで初めての日本語の教科書『日本のことば』をリベッタ氏と共著。原本は 2004 年、寺崎裕則がカ・フォスカリに寄贈す。1916（大正 5）年、33 歳で一時帰国。

『壁画及フレスコ』（アルス美術講座）、『エッチングの技法』（アトリエ社）、『テンペラ画新研究』（アトリエ社）他『みづゑ』等に多数執筆。文展、帝展無鑑査、創作版画会、テンペラ画会、壁画会を創立。個展（三越 3 回、白木屋 2 回）、神戸、大阪（2 回）、伊太利美術展（ピオラ氏と共催、三越 2 回）。

① フレスコ

ルネサンス壁画は、画面の対角線の 7 倍の距離で見るとピントが、フォーカスが合うように出来ている。寺崎武男の作品は壁画に限らず、すべての絵は、大小に関わらずすべて、近くで見るとよく分らなくても、7 倍の距離に引いて見ると絵の遠近がくっきりと浮かび上り、立体感を増し、寺崎絵画の特色であるディナミックとオーケストラチオンがみちて来て、絵が生き物のように動いてくるから不思議だ。天来の壁画家である。

【作品】東大付属病院アーケード天井壁画、法隆寺輪堂壁画、房州下立松原神社齋忌の〈安房開拓神話〉12 枚、目黒碑文谷サレジオ教会〈主の洗礼〉

② テンペラ

遣欧少年使節壁画。1907 年渡伊し寺崎武男が日本人として初めてその事跡を発見。以後ライフワークとなる。

【作品】 連作 12 枚（青山学院蔵）、〈ヴァチカンへの行列〉〈ヴェニスでの歓迎図〉（長崎市立美術館蔵）、〈扶揺万里の風（ヴェニス歓迎の図）〉（横浜税関貸室蔵）、屏風二双（京都・星野画廊蔵）（註）大作のみ

③ エッチング

日本近代エッチングの草分け。ニューヨークでもフィスラーを思わせる、と絶賛された。寺崎武男絵画の特色である『ディナミックとオーケストラチオン』をいかに発揮している。

【作品】〈ヴェニス・リアルト橋〉（4 種類）、〈ゴンドラ浮かぶリアルト橋〉、〈ヴェニスの橋のある風景〉、〈嘆きの橋〉（2 種類）、〈カナル沿いの市場〉、〈ヴェニスのカナル〉（2 種類）、〈ヴェニスの船着場〉（2 種類）、〈繋留するゴンドラ〉、〈船を造る家〉（2 種類）、〈賑わうサンマルコ広場〉、〈ドゥカーレとサンマルコ広場〉、〈海からのドゥカーレとサンマルコ広場〉、〈ヴェニス・ドゥカーレ宮殿〉、〈ゴンドラのあるドゥカーレ宮殿〉、〈国旗はためくヴェニスの広場〉、ドライ・ポイント〈カナル沿いの市場〉

④ リトグラフ

【作品】〈ヴェニスの船出〉、〈ヴェニスの昔〉、〈ヴェニスの女〉

Ⅲ. 寺崎武男、画家としての基礎

① 模写作品、画材画質描法の研究

明治神宮外苑絵画館調査委員

最初の滞伊 10 年で、ヴェニスを拠点に全欧州をかけ巡り、名画の画材画質描法を模写を通して徹底研究をすると同時に、時代が第一次大戦前夜と重なったこともあって、イタリアの建築物、美術品が破壊の危機にさらされた「美術品保護の大問題」と関わって一層の研究に励む。模写の手始めは、天正遣欧使節の事蹟の発見をいち早く母校の東京美術学校・校長正木直彦氏に報告、ヴィチエンツアのオリニコ劇場（1579 年）の壁画〈日本使節歓迎之図〉を模写し送った。

1919（大正 8）年、明治神宮奉賛会より絵画館を創るための調査員に任命され再渡欧し、画材、画質を研究した上で名画の模写を行うと同時に「明治神宮奉賛会通信」の雑録に逐一、報告すると同時に〈ルネサンス諸大家ノ傑作二十枚〉を模写し、三井合名会社・林建氏宛（麹町富士見町 1-

29）に発送した。

「ヴェニス派」ティツィアーノ 4 枚、ティントレット 1 枚、ティエポロ 1 枚、「フロレンス派」ピエロ・フランチェスカ 1 枚、ラファエロ 2 枚、ミケランジェロ 2 枚、サルト 1 枚、フィリッピノ・リッピ 1 枚、レオナルド・ダ・ヴィンチ 1 枚、「オランダ派」ルーベンス 1 枚、レンブラント 1 枚、「仏国派」グリムモー 1 枚、「米国派」ドラクロア 1 枚、「英国派」レイノルズ 1 枚、「フランドル派」ヴァン・ダイク 1 枚に、天正遣欧使節の自作《扶揺万里の風》と題する〈羅馬に入市、グレゴリウス十三世の歓迎〉〈ヴェニスに着する大統領ニコル・ダ・ポンテの謁見〉〈ヴェニスに於て歓迎せられたる光景〉を万代にまで残る絵として送ったものの、大正大震災でその大半を焼失。

寺崎武男は、模写美術館を創る夢を持っていたが、その夢は雲散霧消し、国家的損失となったが、各絵の画材画質は明治神宮奉賛会の雑録に記されており、今でも貴重な資料として残っている。

② デッサン、クロッキー

デッサン〈ある哲学者〉〈雨にぬれたサンマルコ広場（コンテ）〉、デッサン帳に無数。クロッキー動きと色彩のあるクロッキーは、当時、パリにしかそうしたモデルはいず、そのため、パリに行き描いたパリの女たち、多数。

④ 歴史、哲学

壁画に欠くべからざるものは、歴史観と哲学である、との考えから、ベルリン大学の歴史、哲学科に学んだのもそれであり、芸術家ならではのインスピレーションで、法隆寺輪堂壁画中央の〈聖徳太子瞑想〉で太子が憲法十七条を書く背後には、救世観音が浮かび上り、宝珠を持つ手は、逆手となり宝珠は地球であり、それをひっくり返す、即ち革命を意味するもの、と描いている。

Ⅳ. 寺崎武男の夢

① 万代までの絵画

寺崎武男は「今」という時代の評価を信じなかった。武男は、絵画の本質を追求し、「万代迄の絵画」を目指した。それには西欧の絵画の伝統を深く身につけると同時に東洋の、日本の持つ美術を

しっかり識った上で、東西絵画の融合をはかり、日本人ならではの絵画を描くことを、己れのライフワークとしたのだ。

② 東西絵画の融合

その結実が、1930（昭和5）年、ヴェニス市ビエンナーレ国際展でテンペラの大作〈幻想＝KUWANNON〉の入賞だ。これは日本人初の栄冠で、今でもヴェニス現代美術館（Galleria internazionale d'arte moderna）の壁面を飾っている。

その年は、ローマのパラッツォ・デルラ・エスポジチオーネで、ムッソリーニ主催による横山大観、下村観山、鏑木清方、前田青邨等、日本を代表する33人の日本画家による現代日本画展が、大倉喜七郎男爵がスポンサーとなってイタリアで初めて開催され、展覧会場はすべて日本からの大工棟梁等により日本式になったため、一大反響を起こしたが、その時のすべてのコーディネートをしたのは武男であった。

2001年、開催後70年「甦る大ローマ展」と題し、ホテル・オークラ別館地下二階の「曙の間」が開かれ、「訪ローマ画家一行（会場内にて）」という写真の中で、一番右端で左手を腰にし太眼鏡をかけた男がいたが、関係者は誰一人それがこの大展覽会の仕掛人、寺崎武男であることを知る人はいなかった。

幻の画家といわれる由縁である。

このようなスケールの大きな展覧会が可能になったのも、武男がその頃、イタリアでは画家としての地位を築いていた証しであり、そのめざましい活躍と日伊親善と文化交流の功により、コメンダトオレ・デルラ・コロンナ・デ・イタリア最高勲章、カバリエレ・ディ・サンティ・マウルチヨ・エ・デ・イタリア勲章など数々の勲章をイタリア国王、並びにイタリア政府より授与された。

1886（明治19）年父・^{とある}遜がイタリア国王より拝授してから44年の時が経つ。

V. 寺崎武男の絵の本質とライフワーク

① 芸術宣言

詩と自然さ。

武男は、滞伊10年後帰朝の1917（大正6）年、吾人の宣言として「芸術宣言」を日本画壇へのメッセージとした。「芸術の実際的生活」「芸術的天然観察」「感覚力の本態を求む」「創作」「非罪惡説」「互扶（愛着）」「本能の発揮」を短く宣言すると共に〔新しき観察〕〔新運動〕〔芸術と人体美〕〔絵画術及絵画学〕〔絵画の詩想〕〔絵画の彫刻〕〔絵画と規則〕〔芸術家と画室〕〔画家の生活〕〔画家の悦び〕〔人体美〕〔美と恋愛関係〕〔裸体美〕〔裸体の流行〕〔霊と肉〕〔生を愛せ〕〔熱情〕〔過激思想〕〔ダイナミズム〕〔オーケストラチオン〕〔愛のダイナミック・オーケストラチオン〕〔主義主張〕〔吾人の生存〕について詳述している。武男34歳の時。

② 寺崎武男絵画の核心

「ダイナミックとオーケストラチオン」

83歳11ヶ月の絵画生涯の核心は、これに尽きる。「芸術宣言」で「画家は自由なる^{マクロコスモス}宇宙の生を得て生存する人間である。しかるに画家はそれ自身^{ミクロコスモス}小宇宙でなければいけない。「あらゆる旧思想と旧状を打破し、一変して新芸術的状态を構成せむとす」と述べ、自分が目指す絵は「ダイナミックとオーケストラチオン」（『芸術』七面社、1917〔大正6〕年2月）であり、「それが芸術上の第一の要素である」と宣言した。

「ダイナミックとは、事物の持っている内部的威力（エネルギー）、及び其事物の發揮表現する気持、即ち、それは目には見えないけれども、吾人を非常に感動せしめる、其の力を云うのであって、是等が集って一つの景色なり、人物なりを形造る時に、その（天然の）ダイナミックの相互の發揮集合せるオーケストラチオンがある。

オーケストラというと、合奏という事であるが、個々の事物が打っている即ちヴィブラチオン（響き）しているダイナミックの感響があるので、その感響が纏り綜合して、即ちフジオン（調和）となって折々、堪え難く芸術家を興奮せしめる、その感興の調子を現わしたものをダイナミックとオーケストラチオンと名づけているのである。」

これこそが芸術上の第一の要素でありその感じをエキスペリメンションするのが、即ち、絵画な

り、彫刻なり芸術上の作品であると。

【作品】テンペラ〈サン・マルコ広場からサン・ジョルジュ島を望む〉、水彩〈ヴェニスのカニヴァル〉、テンペラ〈ヴェニス〉、水彩〈ゴンドラの岸〉、屏風テンペラ〈コルチナ・ダンペッツォ〉、水彩+パステル〈夏の日（イタリア）〉、パステル〈村の木〉 仏伝図／テンペラ〈出城図〉法隆寺上御堂＝宝物殿、仏伝図／テンペラ〈涅槃図〉法隆寺上御堂＝宝物殿、仏伝図／テンペラ〈涅槃図〉法隆寺上御堂＝宝物殿、テンペラ〈樹下正覚〉、パステル〈秋色〉、屏風／テンペラ〈平和来る、春の女神〉、テンペラ〈房州の海〉

③ 西洋史学者 大類伸の寺崎画観

武男と獨協中学以来親友の西洋史学の権威大類伸文学博士は、この稀有な画風が「古今のイタリア画家の作品から影響を受けたことは、云うまでもないが、私は、同君の作品を思う時、いつもベニスの画家、ティントレットを思い出さずには居られない。ベニスのルネサンス画を代表するティチアンに対して、一種の叛逆児のような感じのするティントレットの荒々しい野心に富んだ奔放自在の画風を思う時、何となく寺崎君の姿を思い出す。」「荒々しい筆触、躍動している人物、すべては生命の激動である。」

④ 〈軍人勅諭下賜〉の図について

明治神宮絵画館の〈軍人勅諭下賜の図〉は、画家寺崎武男を知る上に最も良い絵だ。西洋画家の中で唯一人、湿気の多い日本で「名作を万代に残す」には、武男が創案した、正倉院の和紙を元に土佐和紙から縦3メートル横2.8メートルの継ぎ目なしの「参宮和紙」を3年間試作して作ったものに日本画家のすべて画いたが、洋画家では武男のみがその和紙に岩絵具などルネサンス・テンペラで1926（昭和元）年に書き、90年近い今日でも昨日描いたようにフレッシュである。和紙がフレスコの壁の役目をしているからだ。明治神宮蔵、小さな元画は出光美術館蔵。なお、修復を一度もされていないのは④〈軍人勅諭下賜〉のみ。

VI. 寺崎武男の プロメテウスの火

① 浪漫への情熱・詩人ダヌンチオとの交遊

寺崎武男は、1921（大正10）年4月、テイロルから、ガルダン湖畔に住む浪漫と情熱の詩人ダヌ

ンチオと会い、知遇を得、ムッソリーニ等のファシスト党を創るも、余りの独裁さに反撥し、すぐに脱退。当時の同志で親友のエットーレ・ヴィオーラはイタリアよりチリへ脱出し、第二次大戦後イタリアを再建。参議院議長となる。彼が90歳のときローマで会ったが、「君のパパは僕の兄貴分だった」の由。

② 義憤

大友宗麟遣欧少年使節の事跡、最初の発見者武男は、生涯さまざまな形で描き続けた。

そして戦後、館山で敗戦で打ちのめされた日本人、若者たちに夢と勇気を与えようとその集大成を画く。まだ僅か16歳から20歳までの若者たちが1582（天正10）年、長崎を出発、イタリア各地で見事な外交使節の役目を果し、西欧文明を学び8年後に帰国する。だがキリスト教は禁教となり、彼等の雄図は何一つ報いられることなく、イタリアの無比の青空に咲いた4つの花卉は、忽ち、むしり奪られてしまった。少年たちを讃え、その名を正しく録すべく、50年の歳月をかけ画き続けた題材を、まるで戯曲^{ドラマ}のような14枚のテンペラ画にして、武男は5年がかりで画き続け『キリシタン文化史的絵画』と題し、1956（昭和31）年に完成させたのだ。

50年同じ題材を画き続けた情熱は何だったのだろうか。それは武男の心の内から沸々と煮えたぎる「義憤」である。

義憤といえば、戦争中よく館山海軍航空隊の予備学生が日曜になると西ノ浜のわが家へ遊びに来た。両親は、一週間、子である先年亡くなった兄の和郎や私への食事をへらしても予備学生たちに御馳走した。それは明日をも知れない若者の生命を思ったからこそだ。そして戦争中画いた絵はすべて、敗れ死んでいった戦士たちの鎮魂の絵である。

【作品】〈アッツ島の血の雪〉〈ミッドウェイ海戦〉〈艦と共に〉

③ 東西絵画融合の結実 法隆寺輪堂壁画

「義憤」と「東西絵画の融合」が、武男の心に燃え続けるプロメテウスの火であり、創造のエネルギーであった。

この二つが重なり合って誕生したのが、法隆寺南大門の右脇にある江戸時代に建立された輪堂内のすべての壁画に画いた『聖徳太子伝』と題するフレスコ壁画である。武男の壁画の原点であり、理想は法隆寺金堂の壁画だった。

イタリアでのルネサンス壁画の研究修得は勿論のこと、ギリシャ、ダルマチャ、トルコ、ビザチン、そしておそらく日本人では初めてであろうドイツの大規模なシルクロード調査隊の一員として、古代壁画を金堂壁画と比較研究しながらその技法修得するだけではなく、宗教画を描くには、帰国の度に教示を受けた佐伯定胤猯下のもとで得度し、僧の位まで受けた。

そうした武男だったからこそ、1949（昭和24）年1月、模写をしていた画家の不注意により金堂が焼失、世界に誇る日本文化の最大遺産を喪失したことに激怒、義憤この上なく定胤猯下に懇望し、国宝の輪堂一面に壁画を画くことが許可された。

武男は焼失直後から館山の自宅で3年間、下絵を何百枚描いたことか。その間、金堂壁画と同じ壁土を法隆寺の裏山で発見、積年の研究による金堂壁画と描法は全く同じにし、だが画題は全く違う太子の人生観、哲学観をテーマに、限らない太子への思慕を込め、1952（昭和27）年1月より壁塗りが始まった。

3月には私も濡れた壁に父武男の指示通り手伝うといっても、そのすべてをひとりで一気に武男が描いていった。正面は〈太子瞑想〉、十七条の憲法を書いている太子の背後には救世観音が幻の如く浮かび、その手には宝珠をひっくり返している。その意は、武男の芸術的直観から宝珠は地球であり、逆手に持つのは革命を象徴しているとの解釈だ。右側の壁画は〈飛鳥の夢〉で隋からの仏教使節到来の歓迎図。左側は〈葉草狩り〉で太子の国民への愛と慈しみを表わし、勾欄は、法隆寺文化の拠って来たる〈東西文化伝播の図〉である。これだけ大きな壁画を69歳の武男は壁が乾いてしまっただけで1ヶ月半近くで一気に描き上げてしまったのである。壁が乾くにつれ、朝日が昇る如く、絢爛たる色彩が浮かび上り、金堂壁画は形を変え蘇ったのである。だが描法は金堂

のそれと全く同じで描いた技法を克明に著した後、骨壺のような入れ物に入れ、密封し、輪堂の何処かに埋め、私にも教えなかった。それはもし100年後にこの壁画が、現在の姿と変わらず生き生きとフレッシュに、文字通りフレスコとして現存されていたら、自分の画いた描法は、金堂壁画と同じ描法であることが実証され、骨壺が発見された暁には金堂壁画の謎も、輪堂壁画の秘密も明かされることになる。

そこに画家寺崎武男の真骨頂がある。武男は現在の画に対する評価を全く信じていなかった。100年後に生き残る画を目標に画き続けたのだ。明治の画人の面目躍如たるものがある。

VII. 日本近代絵画で欠落した部分

① 日本近代絵画で欠落した部分

それは日本の修復家のオーソリティ歌田真介先生の言を借りれば、「明治以降百年が経ち、日本近代絵画の欠落した部分が明確に見えて来た。それは万代まで絵を残すという考えがなく、そのため画材画質の研究を怠り、絵の落剥が激しく、修復し得ないのが現実である」とのこと。武男は若い時からそれを徹底研究した上で、理想の絵を死ぬまで追い求めたのだ。

それが寺崎武男の画業、そのものである。

② なぜ「忘却の彼方の人、幻の画家」となったか

武男は、1938（昭和13）年、55歳を期に、日本の画壇からは一切手を引き、房州の館山の別荘で、三島由紀夫氏の言葉を借りるなら「無理解と孤立には少しも煩はされずに、悠々と、晴朗に、芸術家たる道を闊歩していた。あくまで走らず、跳ばず、悠々たる散歩の歩度で。氏こそ、真の意味で、芸術家の幸福を味わった人ではなかろうか」（「寺崎武男 回顧展」1967〔昭和43〕年4月）と。

③ その秘密—55歳で画壇から一切手を引く

武男は「忘却の彼方の人」となったが「売り絵に身をやつしたら、自分の芸術は墮落する」との信念から売り絵をしなかった為、膨大な絵を残した。私は、それらの絵を80有余年間見続けているが、一度も見飽きたことがない。

不思議なことである。